

耳鼻咽喉科外来における慢性咳嗽患者の診断および治療経過の現況

兵庫県立加古川医療センター耳鼻咽喉科 阪本浩一

耳鼻咽喉科を慢性、遷延性咳嗽を主訴に訪れる患者の原因は、後鼻漏症候群、咽喉頭酸逆流(GERD)、喉頭アレルギーなど多岐にわたる。現実の外来では、これらの原因が重複して存在し診断治療を困難にしている。

現在当科では、鼻疾患に対して、問診、鼻内所見、ファイバースコープより、後鼻漏症状の有無、鼻粘膜の状態、鼻汁の性状を評価し、副鼻腔CT等を用いて副鼻腔炎の診断を行なっている。また、GERDの関与に関しては、F-スケールを用いてスクリーニングを試みている。また、アトピー性の診断は、CAP-RAST検査、鼻汁、咽頭粘液の好酸球検査を施行している。また、ファイバースコープでは喉頭所見も観察している。これらの結果を総合的に判断して、副鼻腔炎による可能性が高いものには、マクロライド、粘液溶解剤を中心とした治療、喉頭アレルギー、鼻アレルギーの可能性の高いものには、抗アレルギー剤、咽喉頭酸逆流が疑われるものに対しては、PPI投与、また、適宜、麦門冬湯、六君子湯などの漢方薬を使用した。経過中に、GERDに関しては、消化器内科にて、上部消化管内視鏡など、副鼻腔気管支症候群、気管支喘息に関して呼吸器内科、口腔アレルギー症候群に関しては皮膚科と協力して診察治療を行なっている。今回、当科における、慢性、遷延性咳嗽を訴えた症例の診断治療の経過を示しその原因の多様性と診断の困難さを報告する。